

## 新装版刊行にあたって

この『ほしぞらの探訪』は今回の復刊で第三版となりました。初版は 1974 年、第二版が 20 年後の 1994 年の刊行です。そして、著者の山田卓先生は 2004 年 3 月 7 日に星の世界へ旅立たれました。

山田先生は 1962 年の名古屋市科学館開館時からプラネタリウムの解説をされてきました。山田先生の業績は枚挙に暇がありません。当時、いわゆる講演調での解説で行われていたところを、独自の発想で話し言葉による対話形式の解説を始められました。

1985 年には、都会の真ん中にある名古屋市科学館の屋上に、当時日本一の口径 65cm 大望遠鏡を設置し、「天文台は山奥に」という常識をうちやぶりました。1994 年には宿泊設備の整った長野県のおんたけ市民休暇村に 60cm の大望遠鏡を設置。プラネタリウムによる事前学習と観望を一体化した、交通の便利な街中の大規模観望会と、何泊もしてじっくり山奥の星を楽しむという、二種類の市民天文台のセットは山田先生ならではの発想と実現力です。

また、今では全国で行われるようになった昼間に星を見る観望会も、この大望遠鏡を活かすために山田先生が定例行事として始められたことです。そして、これらの行事を継続的に進めていくための指導者養成も始められました。

長年の山田先生のさまざまな試みのおかげで名古屋市科学館のプラネタリウムは人気を博し、2011 年の大規模な改築で、世界一の大きさのドームを持つプラネタリウムとなりました。これは 1980 年に地人書館の月刊誌『天文と気象』の連載記事の中で山田先生が描かれた巨大なドームを持った未来のプラネタリウムのイメージを一部実現したものとと言えます。山田先生が描かれた夢のプラネタリウムと比べるとまだまだですが……。

この名古屋市科学館の新しいプラネタリウムを山田先生にご覧いただけなかったことが残念でなりません。しかしその改築の主要な役割を、山田先生を慕って当館に集い、先生に育てられた仲間たちが担っていました。今の名古屋市科学館があるのは幾重にも山田先生のおかげなのです。

1979年、名古屋市内の高校の天文部に入ったとき、狭い部室で先輩たちが『バイブル』と呼んで大切にしていた「本」。それがこの『ほしぞらの探訪』でした。本書は初版から5年で、生意気な高校生たちが最大級の敬意をもって大切にするという「本」になっていたのです。この本を形容する上での『バイブル』という言葉を、自分のいた高校だけではなく、その後出会うことになる多くの方から聞きました。往年の天文ファンにとって、この本はまさに『バイブル』だったのです。

街中にある高校校舎の屋上での徹夜観測でも、山奥での合宿でびっくりするほど多くの星の下でも、星雲や星団、二重星を探す時、いつも赤色カバーの初版がいっしょでした。山田先生は、「あとがき」で「他人のみた印象などあてにならないということだ。本書の“みえかた”についての記載も例外ではない」と書かれているのですが、とんでもない。どれほどこの本の記載に助けられたことでしょうか。どれほど時々忍ばせてあるウィットの効いた表現にニヤリとさせていただいたことでしょうか。

その後、縁あって名古屋市科学館・プラネタリウムの解説者となり、山田先生の下で、前述の仲間たちと共に、第二版のお手伝いをさせていただくことになりました。まさかのめぐり合わせに、高校の時の自分に話してびっくりさせたい気分でした。この第二版は星の位置を1950分点から2000年分点に置き換えつつの再版で、カバーの色は青になり、スタッフ間ではそれぞれ「赤探」（あかたん）・「青探」（あおたん）と呼ばれるようになります。

時は流れ、プラネタリウムの解説者も世代交代が進みました。入ったばかりのスタッフに、解説者の心得の一つとして『ほしぞらの探訪』を買って熟読せよ、と指示したところ、なんと「版元品切れ重版未定」とのこと。もうそんな歳月が流れていたんですね。今回、多くの方からの熱い要望、そして地人書館の柏井さん、永山さんのご尽力もあって、この復刻となりました。

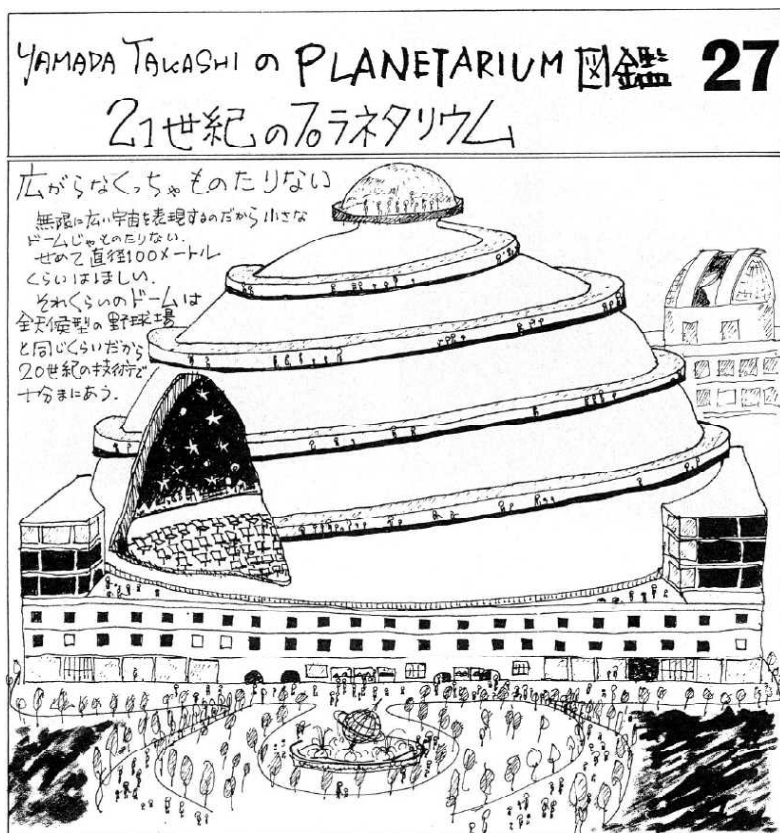
今回の新装版は、改訂ではなく復刻とさせていただきました。1974年の初版以来、43年もの歳月が流れました。それだけ長く読み継がれてきた『バイブル』そのものの良さを、懐かしさも含めて楽しんでいただこうということです。山田先生もいらっしゃらないことですから、誤植などの最小限の修正にとどめ、表記や読み方が懐かしいところはそのままにしました。星の位置は第二版時点で2000年分点になっているので、実用上は全くの現役としてお使いい

ただけます。

山田先生がひとつひとつ小型望遠鏡を使って探し、見た天体たち。そのプロセスをわかりやすいように、見つけやすいように、そしてなんととっても読者が楽しめるように表現されているこの『バイブル』の魅力は尽きることはありません。

2017年3月7日

名古屋科学館 毛利勝廣



『天文と気象』1980年3月号より